令和7年度 第1回下野市教育委員会臨時会議事録

日 時	令和7年7月2日（水）午後2時30分～午後3時30分			
会 場	下野市立古山小学校 体育館2階 ミーティングルーム			
出席委員	教 育 長	石崎 雅也	職務代理者	永山 伸一
	委 員	佐間田 香	委 員	川田 玲子
欠席委員	委 員	青木 正徳		
出席職員	教育次長		米井 正和	
	教育総務課長		古橋 栄一	
	学校教育課長		稲見 雄太	
	生涯学習文化課長		野口 修一	
	文化財課長		伊藤 隆行	
	スポーツ振興課長		根本 宣明	
	学校教育課課長補佐兼管理主事		小野 慎吾	
	学校教育課主幹兼指導主事		佐々木功一	
	教育総務課課長補佐		厚木 充	
	教育総務課副主幹		若林 直樹	
	古山小学校長		高橋 修一	
	古山小学校教頭		小栗 昭彦	

公開・非公開の別 公開

傍 聴 者 1 人

報道機関 0 人

議事録（概要）作成年月日 令和7年8月18日

討 議

「市内児童生徒の欠席の背景について考える」

- (石崎教育長)
1. 開会
 2. 教育長挨拶
 3. 議事録署名人の選任 永山委員及び佐間田委員を指名
 4. 討議

今回は「市内児童生徒の欠席の背景について考える」というテーマで討議を行う。

はじめに、事務局から説明を求める。

(稲見学校教育課長)

資料に基づき説明を行う。

資料1 令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要（文部科学省作成）

資料2 令和6年度第4回下野市長期欠席傾向児童・生徒調査結果（下野市教育委員会作成）

資料3 令和6年度3月末長期欠席一覧表（下野市教育委員会作成）

(石崎教育長)

古山小学校の状況について聞かせてほしい。

(小栗教頭)

不登校の背景については、様々なケースがある。学習に不安がある、人間関係などがきっかけの場合もあるが、夏休み明けに急に来なくなる場合もある。最初の時期を逃すと、長期化する傾向にあるので、休みがちになったときに教師が繋いでいくよう努めている。長引いてしまった場合は、保護者と連絡を取りながら、学校との繋がりを切らないよう努めている。これらの効果はあったように感じている。児童一人ひとりの背景にあるものが見えないところがたくさんあるが、保護者と相談しながら行っている。

(石崎教育長)

質疑等はあるか。

(佐間田委員)

学びの場はたくさんあるので、児童生徒が生きる力を身につけていけるのであれば、場所は限らなくてもよいのではないか。しかし、心がつかったり、本当は行きたいのに行けない、というケースもある。どのようなケースがあるのか。

(小栗教頭)

子どもによってタイプが違う。サポートセンターやスマイル教室に繋いで相談するよう保護者に伝えても、断られる場合もある。

(佐間田委員)

タブレットの貸出状況について伺う。

(小栗教頭)

学年ごとに対応を任せており、週に1回はタブレットで課題を出して持ち帰るようにしている。不登校の児童については、タブレットを渡しており、いつでもオンラインの授業ができるよう保護者に伝えている。電源が入っているかどうかは確認できるが、授業を見ているかどうかは確認できない。要望があれば、タブレットの学習も行っている。

(高橋校長)

別室登校の児童は、別室でタブレットを使用して、教室の学習の様子を見るなどの方法も行っている。

(佐間田委員) 義務教育は学ぶ権利だと思うので、それを奪ってはいけないと思う。タブレットがあるなら貸し出しを推進して、学びとの繋がりのお機会として利用してほしい。

(石崎教育長) 他に意見等はあるか。

(永山委員) 学びの機会を保障しようと思うと、学校以上の学びの機会はなかなかない。オンライン授業にしても、クラスの授業が常にオンラインで流れているのであればできると思う。しかし、現時点では難しい。全ての子どもにすべからず学びの機会を、と言葉で言うのは簡単だが、実際は難しいのではないかと考えている。子どもの対応にしても、一人ひとりみんな違う。これを一律にこうすれば不登校の問題が改善する、というものを見つけるのは難しいと思う。ただ、準備は常に整えてケアができるようにしておくべきだが、根本的な解決には結びつかないのではないかと考える。

(石崎教育長) 他に意見等はあるか。

(川田委員) 不登校の子にとって学校は敷居が高い。今日は調子がいいから学校に行ってみようと思ったとき、教室の他に保健室や学習室等用意されているところがあれば、ハードルが低くなって行きやすくなるのではないか。中学校は保健室や学習室に先生がいる。保護者としては1時間でもいいので学校に行してほしい、という気持ちがある。1日ではなく、1時間でも良い、ということ子どもたちも保護者も知っていれば、不登校気味の子も学校に足を向けるのではないか、と思う。

(石崎教育長) 各学校の対応についてはどうなっているか。

(稲見学校教育課長) 中学校は校内教育支援センターを用意している。今年度専属の支援員を2名配置した。各学校で、来られる時間帯に来て、自分のペースで学習ができる環境は整っていると思う。小学校でも学校によってはそのような場所を用意しつつある、という話も聞こえてはいる。

(石崎教育長) 川田委員から1時間でも良い、という話があったが、以前「学校に興味をわいてきたので、とりあえず夕方学校に来て、先生と顔を合わせて帰る。それで出席になれば、本人の励みになる」という形で相談を受けたことがあるが、それではさすがに認められない。学校に来て、マンツーマンでも良いので1時間だけでもきちんと勉強をすれば出席とする、ということで話をした。そこから少しずつ自信をつけていければ良いと考えている。

(川田委員) 給食費を払っているのだから、最初のステップは給食を食べにおいで、でも良いと思う。不登校の保護者としては、昼食を準備していくのが負担になる。共働きの家庭も多いので、子どもを家に置いていかななくてはならない、という不安はどの保護者も持っていると思う。また、子どもが不安なことを打ち明けられる先生

を1人でも良いので配置してほしい。保護者も先生と繋がっているが、子どもと学校が繋がってもらうのが一番良い。

(石崎教育長)

他に意見等はあるか。

(永山委員)

登校していれば、学習もできる、社会に関わる準備ができるなど、学校に行っていれば三方よしである。しかし、一度学校に行かなくなると、解決しなければならない問題が不登校1つではなくなる。例えば、家庭において誰が見るのか、子どもの居場所の問題が1つ。他にも、学びの保障の問題、社会との関わりという人間関係の問題。学校に行かなくなると3つの問題が出てくる。これを1つに解決しようというところに無理があると思う。

例えば、学習の問題を取り上げると、意外と不登校の子は大学に行つてのびのびとする子もいる。高校までと大学の違いは、自由度の問題になると思う。学びの保障というと、勉強を教えることばかり考えるが、本質は大学入試改革なのかもしれない。一定数学校に適応できない子がいるということで、大学の選抜方式も本来は見直さなければいけない。小学校、中学校、高校で不登校の問題を解決すると言われても、できないのではないかと思う。まず1つは、学びの保障について、すべてを上手に学べる大人になるよう望んではいるが、何かに特化して学ぶこともできる。それは今の共通テストで測るような大学入試制度では無理だと思う。特別なものを作る、ということで学びの部分の解決になる。

次に、子どもの居場所の問題について。実は、家庭に子どもの居場所がないから学校に行く。かつてであれば、家庭という居場所があったけれど、今は共働きの家庭が多いので、居場所がない。これは別に解決しなければならない問題。不登校の問題を学校の問題とって社会が投げかけること自体に無理がある。文科省も、不登校は問題行動ではないと言いながら、問題行動としている。本来は問題行動ではない。学制から150年過ぎて、実は学制そのものに無理があったことが露見したのに、まだ学校で解決するようところが問題であると思う。

(石崎教育長)

他に意見等はあるか。

(青木委員)

不登校と一言で言っても、10人いれば10通りの原因がある。子どもも葛藤していて、行きたいけれども行けない不安がある。先ほど教育長が1時間勉強しなければいけない、と出席のルールを言っていたが、下野市教育委員会として、出席のルールは決まっているのか。

(石崎教育長)

一校長として決めているということ。

(青木委員)

校長裁量で決めているということだと思う。登校にも段階があって、頑張つて学校へ来て、校門に触つて帰る子もいる。頑

張ったことへのご褒美を考えていくと良いのではないか。先の例のように、1時間勉強したら、というのはむしろハードルが高いのではないかと感じた。甘やかすということではないが、段階を踏むことで、子どもが良かったという気持ちになれることの繰り返しで現状を変えていくのではないか。人と人との対応が大切だと感じた。子どもにやる気を起こさせるための何かがあると良いと思った。

(佐間田委員)

医療に携わっているもので、頭痛、腹痛、めまいの症状が頻発しているということは、自律神経が乱れていることになる。行きたいけれど行けない、という気持ちの問題ではなくて、朝起きられないから行けないのではないかと、思った。子どもたちも、何が原因かわからなくて混乱している。本当は休み始めた初期に対応できれば良いのかもしれないが、体調が崩れてしまっただけは休ませてあげるしかないのではないかと。そのような子どもたちに関わっていると、まずは歯を磨く、お風呂に入る、身なりを整えて外に出るだけでもハードルが高い。今までは友達とラインなどで繋がっていたことが安心材料だったのに、外れてしまった時点で、関わるのが怖いけれども見ざるを得ないので余計ストレスになっている。そうすると、昼夜逆転していくケースが多い。昼間みんなが活動している中、自分だけ家の中にいると余計取り残されたような気持ちになる。夜は、自分が起きていてもみんなは寝ているし、家族がいるので安心材料になる。そうすると、だんだんサイクルを戻せなくなる。急にサイクルを戻すのは難しい。今はその子どもたちが何年後かに強くなって立ち上がっていくことを見守っていく時期だが、どのように支えたらよいのか。

(永山委員)

大人が固定観念で考えすぎている気がする。学校に行かないと人間関係が築けない、学びもできない、と考えすぎている。以前、不登校の子に困ったことがないか尋ねると、「何もない」と言っていた。「勉強は好きで、自分で参考書を買って勉強している」とも言っていた。単にみんなと一緒に学校で勉強することが嫌なだけ。昼夜逆転になっているが、夜に起きて勉強している。自分の問題を自分で分析していた。

学校に引き戻して、少しずつ馴染んでくれば元に戻る、というのは、大人たちの妄想のような気がする。学校というプロセスを経ないで社会に出ていく者も社会はそろそろ認めないと、不登校という問題行動ではない問題はそのまま残っていく気がする。

(石崎教育長)

貴重なご意見、感謝申し上げます。本日のテーマである欠席の背景について絞ってご意見をいただきたい。先ほども出た昼夜逆転について、コロナ禍で学校に来られない中、スマホの普及

もあり夜ゲームをやることで昼夜逆転してしまった。学校が再開したが、来られない子が一気に増えた、ということがあった。あるいは、学校に来て寝ている子もいた。コロナ禍が与えた影響は大きかったと思う。他に要因、背景について何か意見はあるか。

(青木委員) 資料にある休み始めた理由について、無気力の子が多い。これは子どもが回答したものか。

(稲見学校教育課長) 学校に調査をかけて、学校が回答したものを集計した。回答したのは学校になる。

(石崎教育長) 教育行政を預かる者としての反省だが、福祉部局との関係を強く持たなければならないと思っている。学校だけに任せて解決を図るのは厳しいと思う。地域の力も必要になるし、家庭の教育力に対する働きかけも必要になる。福祉部局と密接に連携を図り、改善を図っていかなければならないと考えている。

古山小学校では、欠席の背景についてどのように感じているか。

(高橋校長) 人間関係作りが苦手な子が背景にあると思う。クラス替えで友達を作れずに不登校になる子もいる。逆に、クラス替えにより来られるようになった子もいた。環境の変化が苦手な子もいるし、それがきっかけになる子もいる。どちらが良いか、というところである。環境の変化も要因の1つだと感じている。

(石崎教育長) 人間関係について、昔は今ほど人間関係で休む、という話は聞かなかった。なぜ、今は人間関係が長期欠席の理由になるのか、その辺について何か意見はあるか。

(永山委員) 子どもは、大人を説得しやすい理由を言う。本人も本当の理由は分からずに、大人を説得しやすい理由を言っている。重要なことであればあるほど、正直に言わない。

(石崎教育長) 休み始めた理由の統計について、栃木県、全国のものはあるか。

(稲見学校教育課長) 資料の中に、栃木県の不登校児童生徒について学校側が把握した事実についてまとまっている。

(石崎教育長) 下野市と栃木県では似たような傾向があるのか。

(稲見学校教育課長) 下野市も県も、割合でみていくと、小学校、中学校共に「やる気が出ない」「不安・抑うつ」「生活リズムの不調」という項目が高い。また、注目すべき点は、勉強が自分の思うようにできない、ということも子どもたちは話している。親子の関わり方についても、子どもの状況を把握するうえでみるところだと思う。

(永山委員) 一番多いのが「不安などの情緒的混乱」である。その奥にあるものを大人たちがどう読み取るかが難しい。理由について、

大人がわかりやすい言葉で整理してしまうと、子どもたちのだるい、などのもやもやした言葉が消えてしまって、本来の理由を言いにくくなる。

(佐間田委員) もしかしたら思春期の在り方が情報時代と共に変わってきただけなのかもしれない。人生のステップの仕方が変わってきたので、支え方を変えていくしかない。

(永山委員) 子どもたちの問題ではなくて、大人たちの余裕のなさの問題ではないか。

(佐間田委員) 学校では正しいこと、間違ったこと、お友達とは仲良くするように習うけれど、社会は違う。苦手な人とも付き合わなければいけない、付き合い方を悩みながら学んでいくのが思春期だと思う。今は幼児教育から、失敗してもいいよと言いながら、失敗しない方法を詰め込まれてきたので、友達に何か言われただけで自分はダメだ、となってしまう。育ち方が違うので、支え方を変えるしかない。

(石崎教育長) 今までの討議の過程を聞いて、何か意見はあるか。

(野口生涯学習文化課長) 学校は仲間もいるし、楽しいから行っていた。今は近くに仲間がいなくてもネットで繋がることができる。繋がりが安心感があれば、必ずしも学校に行かなくても良いと思う部分もあるのではないか。地域や部活動も含めて、学校に行きたくなくなるような楽しみを勉強以外でも見つけられるようにするのも1つの方法だと思う。

(根本スポーツ振興課長) 川田委員のご発言にあったように、給食だけ食べにくるなどを試験的に導入している自治体もあるので、学校に来たくなるきっかけや、ハードルが低くなるような要素があると良いのではないかと思う。

(石崎教育長) 部活動だけ来る、ということはあるのか。

(稲見学校教育課長) 教室の中で授業を受けるのがつらい、ということで昼間は登校できないが、部活動は好きなことができるし、仲間もいるということで、部活動には来ていた子はいた。周りで迎えてくれた子や顧問の先生がいたことも大きかったと思う。

(石崎教育長) 他に意見等はあるか。

(青木委員) 不登校というと、子どものことに目線が行きがちだが、そこには保護者の方もいるので、保護者をサポートできるよう福祉部局との連携も必要。下野市の良いところはサポートセンターがあり、そこで保護者の相談にのっているところである。教育委員会だけではなく、福祉部局とも連携して保護者のつらさをカバーしてあげると、子どもたちに還元されるのではないか。

(佐間田委員) 給食はグループになって食べているのか。

(高橋校長) 古山小学校は前向きで黙食となっている。

(石崎教育長) 市内の状況を把握しているか。

- (稲見学校教育課長) 数までは把握していないが、グループで食べている学校もあると聞いている。
- (永山委員) 必ずしも小中学校の不登校は、そこで人生の道が閉ざされるわけではないということを、大人たちは認識しなければいけない。
- (川田委員) 私たちが子どものときは、情報も少なかったし、コミュニティが学校しかなかった。今はインターネットで繋がっていると、学校に行かなくても困らないし、本当に仲の良い友達とだけ繋がっていれば良い。私たちが子どものころは、学校の先生は怖い、行かないと怒られるというイメージがあった。今の学校の先生は優しい、言い方を変えれば甘いので、叱ってくれる先生がいても良いのではないかと、思う。また、学習室について、先生とマンツーマンだと子どもが緊張する。学習室の在り方も、子どもに聞きながら考えていただきたい。
- (石崎教育長) 今までの討議を聞いて、何か意見はあるか。
- (佐々木指導主事) 貴重な体験ができた。今後活かせる意見があった。古山小学校のお話で、「関係を切らないでいた」という言葉があった。様々なケースがあるが、関係を切らないでいた、そして受け入れてくれる土台があったからからこそ、学校に来られたのだと思う。学校の負担は大きいけれど、関係を切らないことが大切なことであると思う。心のエネルギーのたまり具合は人それぞれ違うと思うが、エネルギーがたまったときに、受け入れられる学校づくりができれば良いと感じた。
- (石崎教育長) 欠席の背景は簡単には見えてこない問題ではあると思うが、本日のご意見を踏まえて、今後の対応を検討させていただきたいと思っている。
- それでは、以上でよろしいか。(全委員異議なし)

本日の議事日程は全て終了した旨を告げ、午後3時30分閉会。

議事録作成者

議事録署名人

議事録署名人